

親鸞聖人と関東の門弟

大谷大学名誉教授 草野顕之

【目次】

はじめに

- 一、関東の門弟とは
 - 二、消息を通じての教化
 - 三、聖教の執筆・書写と送付
 - 四、門弟からの懇志
 - 五、上洛する門弟たち
 - 六、逗留する門弟たち
- おわりに

【親鸞聖人略年譜】

(和暦)	(西暦)	(年齢)	(事 項)
承安 三	一一七三	一	この年に誕生（一説に、四月一日）。
養和 元	一一八一	九	春、慈円のもとで出家し、範宴と名乗る。
建仁 元	一一〇一	二九	比叡山をおりて、六角堂に参籠し法然の門に入る。
承元 元	一一〇七	三五	専修念仏が停止され、親鸞は越後に流される。（承元法難）
建暦 元	一一一一	三九	流罪を許される。
建保 二	一一一四	四二	この年、常陸へおもむく。下妻の境ノ郷から稲田へ移る。
文暦 元	一二三四	六二	親鸞と家族、この年前後に帰洛し、五条西洞院に住む。
建長 七	一二五五	八三	火災に遭い押小路南万里小路東の善法坊に移る。
建長 八	一二五六	八四	関東へ使者として派遣した息・善鸞を義絶する。
弘長 二	一二六二	九〇	善法坊にて示寂。

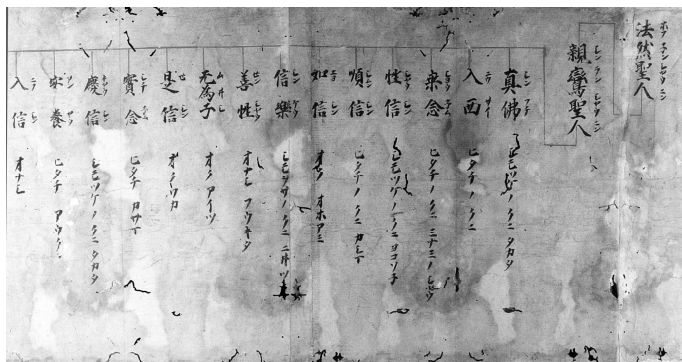
【資料】

①『親鸞聖人惣御門弟等交名』（光照寺蔵、ルビは略す、原本は一行で記す）

法然聖人

親鸞聖人

真仏	シモツケノクニタカタ
入西	ヒタチノクニ
乗念	ヒタチノクニ ミナミノシヤウ (シモツケノクニ)
性信	シモツケノクニ ヨコソ子
順信	ヒタチノクニ カシマ
如信	オクオホアミ
信楽	シモツケノクニ ニキツ、ミ
善性	オナシ フウキタ
无為子	オクアイツ
是信	オクワカ
実念	ヒタチカサマ
慶信	シモツケノクニ タカタ
安養	ヒタチ アウケン
入信	オナシ
(以下、東国門弟二一名 洛中門弟八名省略)	



【東国門弟】

常陸国一八名
下野国六名
陸奥国五名
下総国三名
武蔵国一名
越後国一名
不明一名
合計 三五名

②『親鸞消息』(『広本』八「推定建長七(一二五五)」一二・廿六付)教忍御坊宛(70)

さては、この御たずねそうろうことは、まことによき御うたがいどもにてそうろうべし。まず、「一念にて往生の業因はたれり」ともうしそうろうは、まことにさるべきことにてそうろうべし。さればとて、一念のほかに念仏をもうすまじきことにはそうらわず。そのようは、『唯信鈔』にくわしくそうろう。よくよく、御覧そうろうべし。

③『親鸞消息』(『広本』一四 建長八(一二五六)・五・廿八付)覚信御房宛(29)

四月七日の御ふみ、五月廿六日たしかにたしかにみ候いぬ。さては、おおせられたる事、信の一念、行の一念 ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。(中略) あなかしこ、あなかしこ。

④『親鸞消息』(『広本』一五「推定正嘉二(一二五八)」十・廿付)浄信御房宛(61)

たずねおおせられて候う事、かえすがえすめでとう候う。まことの信心をえたる人は、すでに仏にならせ給うべき御みとなりておわしますゆえに、如来とひとしき人と経にとかれ候うなり。

⑤『親鸞消息』(『善性本』四「推定正嘉三正元年間(一二五七・六〇)」十・十六付)しのぶの御房宛(二)

たずねおおせられてそうろう撰取不捨の事は、『般舟三昧行道往生讃』と申すにおおせられて候うを、みまいらせ候えば、「釈迦如来・弥陀仏、われらが慈悲の父母にて、さまざまの方便にて、我等が無上信心をばひらきおこさせ給う」と候えば、まことの信心のさだまる事は、釈迦・弥陀の御はからいとみえて候う。

⑥『親鸞消息』(『善性本』七の口「推定正嘉年間(一二五七・五九)」十一・十八付)専信御坊宛(48)

おおせ候うところの往生の業因は、真実信心をうるとき撰取不捨にあずかるとおもえば、かならずかならず如来の誓願に住すと、悲願にみえたり。「設我得仏 国中人天 不住定聚 必至滅度者 不取正覚」(大経)とちかい給えり。

⑦『親鸞消息』(『末灯鈔』一〇「推定建長八」五・五付)しょうしんの御ぼう宛(4)

御ふみくわしくうけ給わり候いぬ。さては、ごほうもんのごふしんに、一念發起信心のとき、無碍の心光にしようごせられまいらせ候うゆえ、つねに浄土のごういん決定すとおおせられ候う。これめでたく候う。

⑧『親鸞消息』(『末灯鈔』一二「推定正嘉三正元年間」七・十三付)有阿弥陀仏宛(一)

たずねおおせられそうろう念仏の不審のこと。念仏往生と信ずるひとは、辺地の往生とてきらわれそうらんこと、おおかたころえがたくそうろう。そのゆえは、弥陀の本願ともうすは、名号をとえんものをば極楽へむかえんとちかわせたまいたるを、ふかく信じてとなうるがめでたきことにて候うなり。信心ありとも、名号をとえざらんは、詮なく候う。また、一向、名号をとえうとも、信心あさくは、往生しがたく候う。

⑨『親鸞消息』(『末灯鈔』一八「推定正嘉元(一二五七)」十一・廿六付)随信御房宛(66)

御たずねそうろうことは、弥陀他力の回向の誓願にあいたてまつりて、真実の信心をたまわりて、よろこぶころのさだまるとき、撰取してすてられまいらせざるゆえに、金剛心になるときを、正定聚のくらいに住すともうす。弥勒菩薩とおなじくらいになるともとかれて候うめり。弥勒とひとつくらいになるゆえに、信心まことなるひとをば、「仏とひとし」とももうす。

⑩『親鸞消息』(『広本』三「推定建長四(一二五二)」日付なし)宛所欠

往生は、ともかくも凡夫のはからいにてすべきことにてもそうらわず。めでたき智者も、はからうべきことにてもそうらわず。大小の聖人だにも、とかくはからわで、ただ願力にまかせてこそ、おわしますことにてはそうろうなれ。(中略) さきにくだしまいらせそうらいし、『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力』なんどの文どもにて、御覧そうろうべし。それこそ、この世にとりては、よきひとびとにてもおわします。

⑪『親鸞消息』(『血脈文集』二「推定建長八」五・廿九付)性信房宛(4)

おおかたは、『唯信抄』・『自力他力の文』・『後世ものがたりのききがき』・『一念多念の証文』・『唯信鈔の文意』・『一念多念の文意』、これらを御覧しながら、慈信が法文によりて、おおくの念仏者達の、弥陀の本願をすてまいらせおうてそうろうらんこと、もうすばかりなくそうらえば、かような御ふみども、これよりのちにはおおせらるべからずそうろう。

⑫『親鸞消息』(『広本』一 建長四・八・十九付) 宛所欠

かたがたよりの御ころざしのものども、数のままに、たしかにたまわりてそうろう。明教坊ののぼられてそうろうこと、まことにありがたきことにそうろう。かたがたの御ころざし、もうしつくしがとうそうろう。(明教は33の明法の後継者か)

⑬『親鸞消息』(『広本』八「推定建長七」十二・廿六付)教忍御坊宛(70)

護念坊のたよりに、教念御坊より、錢二百文、御ころざしのもの、たまわりてそうろう。さきに、念仏のすすめのもの、かたがたの御なかよりとて、たしかにたまわりてそうらいき。ひとびとに、よろこびもうさせたまうべくそうろう。この御返事にて、おなじ御ころにもうさせたまうべくそうろう。(護念坊69、教念御坊46)

⑭『親鸞消息』(『広本』一一「推定建長七」十二・廿六付)慈信御坊宛(慈信は実子善鸞)

九月二十七日の御ふみ、くわしくみそうらいぬ。さては、御ころざしの錢五貫文、十一月九日にたまわりてそうろう。

⑮『親鸞消息』(『御消息拾遺』二 正応元(一二五九)・閏十・廿九)たかだの入道殿宛(二人々の御ころざし、たしかにたしかにたまわりて候う。なにごとにもなにごとにも、いのちの候わんほどは申すべく候う。

⑯『親鸞消息』(『広本』一四「推定建長八」五・廿八)覚信御房宛(29)

専信坊、京ちかくなられて候うこそたのもしうおぼえ候え。また、御ころざしのぜに三百文、たしかにたしかにかしこまりて、たまわりて候う。

⑰『歎異抄』(第二章)

おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。

⑱『親鸞消息』(『御消息拾遺』一「推定建長七」十二・十五付)真仏御房宛(1)

このえん仏ぼうくたられ候う。ころざしのふかく候うゆえに、ぬしなどにもしられ申さずして、のぼられて候うぞ。ころにいてぬしなどにもおおせられ候うべく候う。この十日のよ、じょうもうにおうて候う。この御ぼう、よくよくたずね候いて候うなり。ころざし、ありがたきように候うぞ。さだめてこのようは申され候わんずらん。よくよくきかせ給うべく候う。(えん仏ぼう1)

⑲『親鸞消息』(『血脈文集』四「推定推定建長八」九・七付)性信御房宛(4)

武蔵よりとて、しむの入道どのともうす人と、正念房ともうす人の、王番にのぼらせたまいてそうろうとて、おわしましてそうろう、みまいらせてそうろう。御念仏の御ころざしおわしますとそうらえば、ことにうれしうめでたうおぼえそうろう。(しむの入道75、正念76)

⑳『三河念仏相承日記』

建長八年丙辰十月十三日に、薬師寺にして念仏をはじむ。このとき真仏聖人・顕智聖・専信房(俗名藤五殿下人弥太郎男、出家後随念「云々」、そうじて主従四人御上洛のとき、やはぎの薬師寺につきたまふ。御下向には、顕智聖は京のみもとに御とうりう、三人はすなはち御くだり。)(真仏1、顕智45、専信48)

②1『親鸞消息』（『広本』一六「推定建長三」十一・廿五付）真仏御房宛（1）

他力のなかには自力ともうすことはそうろうとききそうらいき。他力のなかにまた他力ともうすことはききそうらわず。（中略）なにごとくも、専信坊のしばらくいたらんとそうらえば、そのときもうしそうろうべし。

②2『慶信消息』（『善性本』^{（一）}の④「推定正嘉二（一二五八）」十・十付）親鸞聖人宛
京に久しく候いしに、そうそうにのみ候いて、ころしずかにおぼえず候いし事のなげかれ候いて、わざといかにしても、まかりのぼりて、ころしずかに、せめては五日、御所に候わばやとねがい候うなり。（慶信13）

②3『親鸞消息』（『広本』一四「推定建長八」五・廿八付）覚信御房宛（29）

四月七日の御ふみ、五月廿六日たしかにたしかにみ候いぬ。さては、おおせられたる事、信の一念、行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。（中略）あなかし、あなかし。

いのち候わば、かならずかならずのぼらせ給うべく候う。

五月二十八日（花押）

覚信御房御返事

②5『蓮位添状』（『善性本』^{（一）}の二「推定正嘉二」十・廿九付）慶信御坊宛（13）

そもそも、覚信坊の事、ことにあわれにおぼえ、またとうともおぼえ候う。そのゆえは、信心たがわずしておわられて候う。またたびたび、信心ぞんじのよう、いかようにかと、たびたびもうし候いしかば、「当時までは、たがうべくも候わず。^{（一日市）}いよいよ信心のようはつよくぞんずる」よし候いき。のぼり候いしに、くにをたちてひといちともうししとき、やみいだして候いしかども、同行たちはかえれなんともうし候いしかども、「死するほどのことならば、かえるとも死し、とどまるとも死し候わんず。また、やまいはやみ候わば、かえるともやみ、とどまるともやみ候わんず。おなじくは、みもとにてこそおわり候わば、おわり候わめとぞんじて、まいりて候うなり」と、御ものがたり候いしなり。この御信心、まことにめでたくおぼえ候う。（一日市を細川行信氏は埼玉県吉川市に比定される）

②6『口伝鈔』（一六条）

一 信のうえの称名の事。

聖人親鸞の御弟子に、高田の覚信房 太郎入道と号す。というひとありき。重病をうけて御坊中にして獲麟にのぞむとき、聖人親鸞入御ありて危急の体を御覧ぜらるるところに、呼吸のいきあらくして、すでにたえなんとするに、称名おこたらず、ひまなし。そのとき聖人たずねおおせられてのたまわく、「そのくるしげさに、念仏強盛の条、まず神妙たり。ただし所存不審、いかん」と。覚信房こたえもうされていわく、「よろこび、すでにちかずけり。存ぜんこと、一瞬にせまる。刹那のあいだたりというとも、いきのかよわんほどは、往生の大益をえたる仏恩を報謝せずんば、あるべからずと存ずるについて、かくのごとく報謝のために称名つかまつるものなり」と云々 このとき上人、年来常随給仕のあいだの提撕、そのしるしありけりと御感のあまり、随喜の御落涙、千行万行なり。

【注】 1、「親鸞消息」の推定年次は多屋頼俊『親鸞書簡の研究』（法蔵館）による。

2、「親鸞消息」などの関東門弟名に付した数字は5頁の図の数字に対応している。

正嘉二	正嘉元	建長八	建長七	建長六	建長二	寛元四	仁治二	文暦二	寛喜二	和暦
一一五八	一一五七	一一五六	一一五五	一一五四	一一五〇	一二四六	一二四一	一二三五	一二三〇	西暦
八六	八五	八四	八三	八二	七八	七四	六九	六三	五八	年齢
		『一念多念文意』(この年以前)			『唯信鈔文意』(十月十六日)					執筆年次
『唯信鈔文意』	『一念多念文意』	『唯信鈔文意』	『一念多念分別事』	『後世物語聞書』(隆寛)	『唯信鈔』	『自力他力事』(隆寛)	『唯信鈔』2回	『唯信鈔』(平仮名)	『唯信鈔』(聖寛)	書写

【関東門弟へ送付した聖教の執筆年次と書写一覧】

常陸

2入西・3乗念・5順信
8慶西・12実念・14安養
15入信・16念信・17乗信
18唯信・19慈善・20善明
21唯円・22善念・23頼重
31法善・33明法・34証信
46教念・49証善・51定信
52道円・53入信・54唯仏
55唯信・56唯円・61浄信
62承信・63教名・66随信
70教忍・71真浄・73中太郎

下野

1真仏・13慶信・24信願
29覚信・36尼法仏・45顯智・50証性・60高田の入道

武蔵

32西念・75しむの入道
76正念

奥州

6如信・10無為子・11是信・25本願・26唯信・28唯仏・47覚円・67明教

不詳(東国)

35西願・57円仏・58覚念
59覚然・64哀愍・65有阿弥陀仏・68平塚の入道
72法信・74源藤四郎

越後

27覚善

遠江

48専信

京都

37尊蓮・38宗綱・39尋有
40兼有・41蓮位・42賢阿
43善覚・44浄信

武蔵

[75・76]

●真仏報恩塔

親鸞直弟子の分布



『真宗新辞典』(法藏館) より